

《翻訳》

# 『バルザック逸話集』 (序文と編集 ジュール・ベルトー)の翻訳(2)

前文と訳 佐藤雅男\*

前文 (翻訳にあたって)

『バルザック逸話集』(1)の前文では、翻訳の意図に関して述べたが、今回(2)では、『文藝春秋』に匿名で掲載された小林秀雄の短めの訳文サンプルと、ジュール・ベルトーという編集者のことを紹介してみたい。

初期小林秀雄の文学と思想の主要な研究対象は、「ランボオ I」「悪の華一面」「様々なる意匠」「志賀直哉」などの作品である。その思想表現の解明に有効なのが、全集未収録の「フランス語講座」「ランボオ伝」「バルザック伝」「バルザック逸話集」「ボオドレエル伝」である。後者を、即自的な表現形態の一種と見なせば、前者は、それよりも完成度が高く、より対自化された作品とも言える。

全集未収録の小林の全文を研究資料として提示する準備は出来ている。そうした公開が、小林秀雄研究の現場に有用性を齎すと考えられる。あるいは一般読者にも、晩年の哲学的文章の『感想』(ベルクソン論)より、初期の文法書やフランス作家の評伝の方が、入門書として適している。

しかし、所謂「著者の遺志」(『感想』の「諸言」)の問題がある。また、そうした全文資料を提示する場所がない。後20年足らずの小林の著作権切

---

\*専修大学文学部兼任講師

れで、何処かの出版社が動き出すことが想定される。初期の「匿名連載」は Web でも閲覧が可能になり、問題作なので、幾つかの議論が巻き起こるであろう。しかし、思想研究の現在性としては、それを待ってられない。それで全集未収録の文章を紀要で紹介して、その思想表現の特質を検討しながら、訳読すべき原文に遭遇し、試行錯誤の翻訳をすることになった<sup>(1)</sup>。

初期小林秀雄の雑誌への匿名連載における仏文訳の特質の一つは、何れも典拠とする原文を、その5分の1程度の分量に摘要することであった。それでは所謂、純然たる翻訳のジャンルに入らない。何よりも彼自身が、それを作品と認めず、全集に入れることを拒否した。だからと言って、どうでもいい文章ではないことが、『感想』と同様に厄介なのである。「バルザック逸話集」に関しても、42個の逸話の9個だけを選択し、比較的長い原文は短く、短い原文は多少とも長めに意識した。その構成は逸話の番号では、23, 27, 9, 7, 5, 10, 6, 38, 20, の順である。(前回の、23, 27, の部分は「29, 23,」の誤記)

今回の翻訳は、前回の続きの、23, から42, までで、後半の「IV, 小説家の特異な人生観 23, 人生とは勇気一無記名」から始めて、最後の「42, 代議士の代表権—フェリイ」までである。小林の「バルザック逸話集」も、先ずは冒頭に、「23, 人生とは勇気一無記名」と「27, シャンフルーリー—との相似一無記名」の順番で開始された。二つとも、ほんの数行の逸話なので、その原文と小林の訳文（雑誌掲載の儘）を、ここに紹介してみよう。

23, La vie, c'est du courage, répond Balzac à un ami qui l'invitait à prendre quelque repos. (バルザックが余り一生懸命に働くので体でも悪くしてはと心配した友人がバルザックに、「さう君のやうに働いてはいけない。是非、少し遊んで、体を休めたらどうだ」と勧めると、バ

ルザックは毅然として、これに答へた。「人生とは、勇気である」)

27, Vous me ressemblez, disait Balzac à Champfleury; je suis content pour vous de cette ressemblance. (或時、バルザックは、自分によく似てゐる、同じく文学者のシャンフルウリイに向つて言つた。「やあ、シャンフルウリイ君、君が己に似てゐうさうだが、何にしても、こいつは喜ばなけりやあならんねえ、君にとつては」)

小林の「バルザック逸話集」は、こうした二つの訳文を皮切りに構成された。どちらも語り手は無記名である。だが、それは強烈な人物像を喚起する短文であり、言外の意に、バルザックという特異な作家が躍り出す趣がある。

ジュール・ベルトーは前回(1)の序文で、『バルザック逸話集』の編集意図が、「浪漫主義の復権」にあることを主張した<sup>(2)</sup>。この編集者は、1877年3月にブルジュに生まれ、1959年10月にビルヌーブ・ルベで亡くなった文学者である。『バルザック逸話集』以外にもアルフォンス・セッシュと共著でバルザックの評伝があり、他にはナポレオンやヴィクトル・ユーゴーの評伝も書いている。死亡した1959年には、Le grand prix de littérature de la SGDL の文学賞を受賞した。私が最初にジュール・ベルトーの名を知ったのは、『ボオドレエルの生涯』(A. セッシュ J. ベルトオ、斎藤磯雄訳、三笠書房、1954年)の「後記」であった。ベルトーとセッシュの二人を並べた短い文章であるが、事典より明快な点があるので、それ(本文記載の儘)を紹介して措こう。

原著者のジュール・ベルトオとアルフォンス・セッシュとは伝記作者として知られてをり、同じく両者の共著に成る『バルザック伝』『ヴェルレエヌ伝』、ほかにセッシュが単独で書いた『スタンダール伝』、等がある。

面白い逸話や事件を巧みに処理、編集して、天才の面目を躍如たらしめるのに、洗練された才能と感覚を有つ「読み物」作者である。

「逸話」(anecdote)とは、世間の目から逸した話で、特定の人物に纏わる興味深い話のことである。ジュール・ベルトーは歴史家でもあり、バルザックという人物が生きた時代背景を視わせるのにも長けていた。「逸話」の同意語に「挿話」(episode)がある。だが微妙な差異として、「挿話」には、文章や物語の途中に差し挟む話の意味がある。それ故、『逸話集』は存在しても、『挿話集』という「読み物」は成立し難い。

前回(1)の翻訳から引き続き、初期小林秀雄の思想表現の特質を検討する基礎資料を作るために、ジュール・ベルトーが編集した『バルザック逸話集』(2)を、訳読してみる。拙訳及び誤訳に関しては、どうか御指摘を頂ければ幸甚である。

『バルザック逸話集』(2)

#### IV、【小説家の特異な人生観】

##### 23、人生とは勇気一無記名

何らかの休息を取った方が良いと勧めた友人に、バルザックは、「人生とは勇気のことである！」と答えた。

##### 24、ベルニー婦人の思い出—フェリイ

『あら皮』<sup>(3)</sup>には、絶妙に甘美な女性への趣味(ベルニー婦人の思い出に触発されたもの)が、一つの悲しみの感情として独占的に作用している。ポーリーン・ゴードンは、『あら皮』という作品の誕生は、そうしたバルザックの精神作用にあると指摘した。

「ポーリーンの言うことは、本当ですか？」

或る日、この小説家に、カストリー夫人が、とても色っぽい感じで尋ね

たことがある。

「ああ！ご婦人。もし、私に秘密の主が決して戻って来ないならば、それは単なる眩惑に過ぎません。ポーリーンの指摘は、今では貴方のせいで、より美しい真実です。」

## 25、女性の手紙と文体の形成—フェリイ

或る日、バルザックとテオフィエ・ゴーチエの間で、女性に関する話題になった。

「文学者は女性との交際を控えなくてはならない。」と『人間喜劇』の作者は言った。「確かにそれは時間の浪費です。」とゴーチエは声高に言い、「しかし、女性は何かのために創造されたはずです。私達には、どんな種類の関係性であれば、許されるのですか？」と質問した。

「まあ、そうだねえ。彼女達に手紙を書くために、交際を制限しなくてはならない。それは作家の文体を形成するから。」とバルザックは答えた。

## 26、文学に通じる人々—ガゼット

それはジュール・サンドやグスタフ・プランシエ、また他の幾人かの流行作家と一緒に居た或る晩餐会での出来事である。会話は文学者の知的所有権や、重要な規制の不備のために、全てのフランス作家が被害を蒙っている盗作と、それらに対する処置の問題に及んだ。

「皆さん！」会食者の一人が叫んだ。「文学に通じる私達の全ては、このような言語道断な事柄を、はっきり禁止させる団体を組織すべきです！」

これらの言葉、所謂「文学に通じる私達の全て」の発言に、バルザックは椅子から大笑いしながら飛び上がって、烈火のごとく言った。

「君が文学者ですか！」彼は叫んだ。「君自身を私達と比較するんですか？まあ、そうなんでしょうね！そうすると、ここに近代文学の執行官と一緒にいることで、君自身の面目を失うことになる！」

## 27, シャンフルーリィーとの相似—無記名

バルザックがシャンフルーリィーに向かって、「君は私に似ているそうだが。」と言い、「そうした相似は、君にとっては、きっと嬉しく誇らしいことだろう！」と続けた<sup>(4)</sup>。

## 28, 未知の訪問—シャルル・モリス

それは、その人や家の中の様子も、まるで未知なる訪問であった。或る日バルザックはアパートの地階に、不意に迷い込んでしまった。突き当たった小さな扉を開けてみると、そこは風呂場で、裸同然の婦人と差向いになった。それでバルザックは即座に、「済みませんが、貴方の旦那さんとお話をしたいのですが。」と、聞き取ることさえ、ほとんど出来ない声音で言い、眼を落し、出来るだけ丁寧に引き下がった。

## V, 【ジャルディにて】

29, 斜めの土地—レオン・ゴズラン<sup>(5)</sup>

ジャルディのバルザックの別荘は、傾斜した土地で、その樹木の高さを計るのは、その場所で休息を取ると同様に困難であった。所有者の空想的方針で、庭師達は、樹木の手入れを続けるのに、滑り止めの小石の技術を使って数か月を費やした。これら高台の連なりは、雷雨や少しの雨にも、まるで愉快に他のものも崩壊させる傾向があった。庭を改修することは、『セミラミ』の絶望的な再構成にも似て、中断せざるを得なかった。

或る日、フレデリック・ルメートルは、ヴォートリンの調査に利害関係を持つバルザックに会い、ジャルディ荘の話になった。傾斜した土地の下に消失した足元を防ぐのは、まるで、ちぐはぐな寄木張りで家具の均衡をとるようであった。その改修には、滑り止めに二つの石の助けを借りる必要があった。彼が再び歩き出すには、また石や防具を離して、より遠くの

方から使用しなければならない。その歩くための術策は、観察するには、非常に面白いものだった。ただバルザックだけが、彼の周りで起こった出来事に、決して無関心ではいられない最高度の質の財産を使用した。そして、これらの絶え間ない崩壊の只中で、所有者の平静さを保とうとした。だがそこには、晴天の霹靂の狼狽があった。

### 30、小さい鈴—レオン・ゴズラン

或る日バルザックがゴズランに言った。

「君には全く見えていない。ジャルディ荘の室内装飾が齎す仕上げの、私が取えて個人的傑作とも言える巧妙で且つ珍しい考案が。そのことを私がここに主張してはいけないのかね？」

「いいえ、そんなことはありません。でも私はまだその刷新に気付いていません。仮に貴方がしたいと思ってしたことならば、それは十分に感じが良いものなのでは…。」

「君自身の周りをよく見てくれ。何が見えるかね？」

「私に見えるのは、展望の開発を損なう全然つまらない壁だけです。貴方の、暗示的な言葉に値するものは、私には全く見えて来ない。」

「もっと良く見てくれ。」「やはり何も見えません。」「ああ、君にはきっと良くない意志があるんだ。」「いいえ。貴方に誓ってそんなことは…。」

「まあいい。ここには私の編み出した発明として大いに称賛すべきものがある。それは君には、確認出来ない事柄なのさ。そうでなくては不完全なのに、今まで繰り返しかくことばかりしてきた。」「けれども、それは何のために?」「不愉快で愚かしいと思わないか。数世紀以来、ずっと鉄壁という産物を作り続けたことは。そして、壁と同様に軽率で大きく愚かな鈴を、鉄壁の先端に沿って見せられるとは。」「私が、この地域特有の鉄の不快な騒音に揺さ振られるのを、決して好まない人々のために作った小さい鈴を、どうか調査して、探求してくれ…。」「私には全く見えない。

何処にあるのか指示して下さい!」「突出部を現わさないように壁の中に隠してある。それで表示はないんだ。」「それが見れないのであれば、人々は考えることさえ出来ないのでは。」「もう既にスクリベは、この種類の小さい鈴を採用した。そのことで彼は大いに喜んでいる。ジャルディの鈴は、それと全く同じものだ。私が嘘をついているかどうか確かめてくれ。」

それで、ジャルディ荘に、小さい鈴が沢山置かれていた。しかし、そのことは、かえって人々を動揺させるかも知れない。ほとんどの使用人に、きつと鈴の音が全く聞こえなくなるのであるから。

### 31, 債権者—レオン・ゴズラン

それはジャルディ荘の扉を叩きにやって来た債権者から、バルザックが如何に逃避したかの話である。巴里からの列車が通過した5、6分後、最初に債権者は魅惑的な女性に訪問させて、私達を驚かせる。もし債権者が、その後、現われなかったら、脅迫の時間は、既に過ぎ去った。それで次の列車まで、安心して休養を取ることが出来る!けれども次のブサントール行の列車の音が鳴り響くとすぐ、家宅捜査に対する警戒心は不動産、果樹園、大草原と野菜畑の全ての場所で増大した。その時の彼の夫よその対策を、ここに確認してみよう。まず彼に、「耳を傾けよ。それは一人だけの債権者であり得る。ほんの一人に過ぎないのだ。」という神の啓示が託される。

それでジャルディ荘の其々の歩行者は、足を停めるように予告される。其の人自身は動かずに、家とすぐ隣りの陰に接した板のようになる。いわば彼は木の幹になる。アポロンの神が、ついでダフネの神も助けにやって来る。それは何と魅惑的な事であろうか!庭師は鋤を上げた儘、それ以上は動かない。今にも吠え掛かろうとする犬は、首輪の紐で引っ張られる。だが、やはり吠えて、犬小屋の藁の上で、ペしゃんこになって唸る。しかし、横柄な女性や庭師のドラ息子の命令で静かになる。



そしてバルザックとその周囲の人々は、壁の外から聞こえる債権者の綾織の青白い嫉妬心を抱く呪いの言葉に、不安の戦慄と同時に隠れた喜びを味わった。そして何事もなく過ぎ去った時間に、大いなる冒涇の振動が聞こえた。それらは全て、神の啓示の言葉の中にあった！

### 32, 空想的調度品—レオン・ゴズラン

バルザックがジャルディ荘のために計画したことには、まるで際限がなかった。其々の剥き出しの壁の上の部分に、彼が備え付けを主張する豪華な調度品の名を、木炭で流れるように書き付けた。今でも、数年間に化粧漆喰の表面に、炭化された文字を見ることが出来る。

「ここにはパロスの大理石の啓示。ここには杉の樹で作られた円柱の基盤。この天井にはユージュヌ・ドラクロアの絵画。ここにはオービュソンの壁掛け。タペストリー。ここにはエナメル塗料の大理石で作られた煙突。ここにはトリニアン風の扉。ここには鳥々の珍しい樹木で作った寄木張りの床を。」

もっとも、バルザックはこれらの空想的調度品に関する冗談を認めていた。そして今、この寝室で、彼の偉大なる特徴を書いている私が笑うのと同じぐらい、否、それ以上に彼は大笑いしていた。それは「ここには、決してお目にかかれない価値以上のラファエルの絵画。」という具合であった。

### 33, 胡桃の木—レオン・ゴズラン

或る日、ヴィクトル・ユーゴーはジャルディ荘に来て、バルザックと一緒に昼食をとった。昼食の準備の間に、この主人の引っ越しの様子を見るために、曲がりくねった敷地の中を散策した。

ヴィクトル・ユーゴーは、意外にも贅辞に関してとても控え目であった。バルザックには、ずっと以前からサン・シモン記念館に疑問を呈する高度

な美意識があった。それなのにユーゴの御世辞はあまり多くなかった。それは悪評判に対する礼儀的な配慮であり、それ以外の何ものでもなかった。私は、その庭の危険な斜面の不均衡で、狭い路地にある歩道が沈み込み、それが仮にバルザックの奇妙な考えからであっても、彼自身にはきつと大声で笑えない世界苦の痛みがあると理解できた。そこはむしろ趣のある風通しの良い大通りである方が適していた。しかし、そうした否定的感想を静かに抑制している間に、ユーゴはやっと称賛に値するような素晴らしい胡桃の木を見付けて、彼が負っていた丁重な賛辞を果たす機会を掴まえた。

「まさに、ここに木というものがある！」その時まで、多少とも舗道の端に植えられた若干の低木しか見ていなかったヴィクトル・ユーゴが言った。バルザックは、初々しい主人の満足げな叫び声を挙げて、

「はい、それはさらに、とびきりの木なんです。」と言った。

「私は最近、同時代の公共性とは何であるかを感じました。真の利益とは、そこから齎されることを御存知ですか？」「それは、まさに胡桃の木であるからでしょう。私が推定するに、若干の胡桃の実と関係があるのでは。」「そうではありません！それは1年で、1500の利益を齎すのです。」「胡桃の？」「いいえ、胡桃ではなく、端的に金額の1500に関係します。」「しかしそれでは、大喜びの胡桃になってしまう。」とヴィクトル・ユーゴが言った。

「多少ともその通りです。けれども私は貴方に、少し説明しなくてはならない。分って頂けるのにあまり難しくないような説明を。私は、たった一本の胡桃の木で、端的に1500フランの金利を齎す方法を公表します。」

私達は説明を待った。バルザックを再び活気づけた胡桃の木は、実に奇妙な存在に属していた。

「私はそれを町で、いつも非常に高い値段で買って来ました。如何してでしょう？その理由は、全ての住民が他の場所ではなく、この樹齢百年の

樹木の根本に寝藁やゴミを堆積するという、実に古臭い用途の義務があるからです。」ユーゴーは譲歩しながら、「なるほど。」と言った。

「こうした胡桃の木は、私が所有して以来、未だその真の機能を果たしていません。しかし、私はそうした所有をこれからも維持します。いかなる住民も個人的隷属から逃れて、前の封建的習慣の儘でいる権利はありません。この樹木の根本の排泄場に、毎日蓄積される肥料の量と富を考えてみて下さい。私は、藁や他の植物の廃棄から出来る町全体の肥料を、農民やワイン栽培者や造園業者、隣接する大小様々の全ての営業者に販売するために、常に胡桃の木の山を維持して賄います。私が、そこに獲得するのは法外な勘定の金額です。それは言わば無数の鳥が居る太平洋のたった一つの島に、幾らかの資金を預けるような人工肥料なのです。」「ああ、そういう事なんですか。」ユーゴーは堂々とした落ち着きで頷いた。「でもまあ、バルザックさん。それは確かに人工肥料に違いないが、鳥というものを差し引いた所の人工肥料ですね」と言った<sup>(6)</sup>。

## VI, 【夢と現実の間で】

### 34, 優雅な趣味—アルヴェリック・スコン

編集者のクージェルマンがバルザックに要請したのは、ルイ・ルーリンの助けを借りて、巴里の美しい通りで、本の制作の準備をすることであった。バルザックは、その原稿の払い戻しに、5千フランを見積もる条件で、その本を、美しいリシュリュエ通りで制作することを提案した。それは半ページほどの印刷物に過ぎなかったが、クージェルマンの要請にルイ・ルーリンは共鳴した。バルザックは誠意を持って、次の様に言った。

「もし私が正確に顔や風景を描画したいと思ったら、貴方には、私がそれらの細部を研究する必要があることがお分かりでしょう。それは、リシュリュエ通りを実際に訪れて、そこで業務に携わる人々の顔を描く方法です。もし私がリシュリュエ通りを訪問しないのなら、そこに住む人々の業務が

どうなるかお分かりですか？その代わりに私はイタリア大通りに行って、コーディナル・カフェで昼食を食べるに違いない。そして若干の仕切り物をブランデュスの店で買うでしょう。隣の武器製造所で射撃銃、それから宝石商でネクタイピン、仕立屋にも服を注文するので、そこではさらなる服作りが出来るでしょう。」「それで靴屋で一足のブーツを？そんな贅沢は、お止め下さい。」とルイ・ルーリンが話を遮った。

「あと一歩で、貴方はインドの会社に入るようなものです。近頃は、明らかにレース細工が台頭しています。それとカシミアの値段は余りに高額では…。」

### 35. ドラマとコメディの夢—レオン・ゴズラン

バルザックがドラマ制作への熱狂を抱いた時、その発散するまでの思想的蓄積は、小説的発散が、彼の両腕一杯に引き上げられるだけではすまなかった。巴里の全ての劇場で、幾つかのドラマとコメディを制作して上演する夢は、この作家を決して後退させなかった。バルザック！ この思想的な醸造を密閉した巨匠は、単にそれだけではなく、その共同作業と特別な運営によって連合した者同志が、其々に提案する考えを結合するという思想を持っていた。彼の家で、その思想が発表された瞬間に、その考えが何であろうと、実際の運営に変容した。これは、そうした急激な化学反応が、如何にそれ自体を運営したかである。

「私がここに抱いている思想は偉大です。それは明朗で強靱なものです。それは花崗岩で出来た薔薇とも言えます。私達はサン・マルタンの扉の大きなエジプトのブロック塊に、絵画の断片を彫刻するつもりです。私はフレデリックの言葉を信じます。フレデリックと共に、もはや貴方達は疑うことは出来ない、それは少なくとも、5千フランにおける150フランの給付です。そこからさらに75万フランを儲けることが可能です。もう一度言います。75万フラン！」

「今すぐ計算して下さい。作者の著作権の12パーセントに、そこからさらに8万フランが私達に戻る権利があります。そして私はここで、既にお見せした養豚業者の手形に関して話す必要はないでしょう。繰り上がるのは、使用料としての5千あるいは6千フランが目当てです。私は、1万フランの原稿に関して話しているので、たった3フランの原稿などではありません。私達の口座のために売られる小冊子の孰れに関してでもないのです。それはさらに3万フランの価値を持った指輪のようなものです。私にはもはや何も言う事はありません…。」

人々は、ヴィデーが病原菌の捉え難い姿を前にした時と同様に、バルザックが運営方針を途方もなく転換した事実を突きつけられた。この計画は、株式市場で見積もる立案としては、まだ提出されていなかった。それを株式市場で公正に、大いに好ましく見積もったのは、ヘンリー・モニエである。どちらにしても4百万フランを獲得するよう定められた助言である。これらの壮大な計算を聞いた後で、バルザックは、「この仕事には、私に百枚のコインの前払いがある。」と言い残して、その一日を終えた。

### 36、『赤馬』の協会—アルフォンス・カー

バルザックは或る朝、私に会いに来て、新しい計画を話した。その後、私達に明示されたのは、居酒屋で楽しく食事会をすることであった。この会合で非常に重大な目的が開陳された。客人はこの召集の2日後に植物園で会わなければならなかった。私は6時の待ち合わせ場所で、確かにメール、デノアイエ、ゴズラン、テオフィル・ゴーチエ、グラニエ・カサニャックと他の2、3の人々が来ていることに気付いた。バルザックはトゥーネル橋の前で、ワイン倉庫を通り過ぎ、今ではもう忘れ去られた地区に私達を導いた。それは『赤馬』という看板の架かった酷い居酒屋であった。夕食が注文され、私達は一種の納屋のような所で給仕された。そしてバルザックは、スープの後に、その計画を説明した。

それは新聞の小説家、才能や将来のある人々を、1ダースに纏めることに関わりがある。そうして、彼ら自身とその友人を互いに励まし、相互関係を活発にさせるという思念であった。人間は、創造的で主導的な意見には、短期間で強力に迫り着くべきで、そこから何らかの利益の一部を勝ち取れる。バルザックは肘掛け椅子から立ち上がって言った。

「教会でも図書館でもなく、そうした特定の領域でもない。私達が認可された後で、決断するような許可でもない。それは当たり前、私達が自身で始めることなのです。」

私達は、その計画が誇大に宣言された後、「赤馬の協会」の洗礼によって認められた新しい会に、忠誠心を誓った。だが、その3カ月後には、もはや何の音沙汰もなかったのを、付け加える必要があるであろうか？そこに煽動された珍妙な出来事は、全てバルザックの名声が主導したものであった。

### 37、オデオン座の公演チケット—フェリイ

或る時、キノラの施設の前で、バルザックはオデオン座の支配人のリリユーと話をした。「キノラの最初の3回の公演の期間中、会場全体のことを私に任せて頂けませんか。」「そのことで、こちらには何が齎されますか？」支配人は尋ねた。「2分の1の利益です。それは数え切れない程に、巨大なものになるでしょう。」リリユーは思案顔で、「その条件を受け入れましょう。」と数秒後に言った。

それで、バルザックは、その提案によって売れるチケットのことを説明した。「人々は、今迄と同じやり方で劇場の予約受付をすればよいのです。通常の煙草屋の受付で、全席は既に万席と答える秩序は保てることでしょう。」

小説家は機知に富んでいた。彼は同様に、オデオン座の席を構成する会計の方法を説明した。「最初の公演での床席は、サン・ルイの騎士会員だ

けのものとするべきです。オーケストラ席は、フランスの巴里市民。前舞台は全権大使と大臣に限ります。代議士と国家公務員は、二階の天井桟敷に迎えなければなりません。三階の天井桟敷へは大型融資をします。中産階級の選良と上流階級の金持ち達で、四階の天井桟敷を使い切るので。」

「それでは、ジャーナリストを何処に座させますか。」リリユーに答えを求められて、「もし、席が幾分でも残っていたなら、彼らは、それらの場所に対して金額を支払うでしょう…。」

「大変に恐縮ですが」と支配人は、ぼそぼそと言った。「もし、ジャーナリストが当然に占有する桟敷席に彼らを送るのを、貴方が無視するなら、…。」

「リリユーさん。このことは二度とは言えません。長い間、私はジャーナリストとの関係を断絶してきました。それは私達の間では、野蛮人の戦争のようなものです。彼らは私にモヒカンのやり方で、頭皮を剥ぐことを望み、モスコロージュのように頭蓋骨で吸飲することを望んでいるのです。」

38, 『クロニクル・ド・パリ』出版の画策—レオン・ゴズランに即して

1834年頃、バルザックは『クロニクル・ド・パリ』と云う自分達の新聞出版のために、『両世界評論』と『巴里評論』の編集者さえ、きっと姿を消すという破壊的な夢想を抱いた。それは彼自身の名声と才能と精神と栄光によって、全てのライバルを消滅させる可能性の提案であった。だが、不幸にも、彼自身がそれを設立するのに許される資金不足という、最も困難な事情を見い出さざるを得なかった。

バルザックに思い当たる伝手は何処にもなく、全てが曖昧な返事ばかりで、新聞出版の扉は閉ざされた儘であった。しかしながら、或る日、彼は若くて華奢な男の訪問を受けた。ニスを塗った足首ブーツ、ストーブのドレス、素晴らしい髷を付けたバプティストのシャツ。それらは彼が有名な

銀行家の息子であることを告げていた。それでバルザックは、彼に『クロニック・ド・パリ』の共同経営を提案するために、特別に親切な行為に及んだ。それはまるで、劇場や衣装店を開くかのようにであった。

一瞥して直ぐバルザックは、この若者が、数カ月に亘って運営してきた後の、資金不足を補填する財政支援者であり、捉え難い程の大きな金の樽であると判断した。若者を歓迎するや否や、バルザックはその計画を誇大に宣伝した。彼はこの新しい出版計画に基づく素晴らしい期待を仄めかした。そして将来の協力的な仲間達と食事会をすることに決めた。

彼は、シャルル・ド・ベルナル、テオフィル・ゴーチエ、ジュール・サンド、レオン・ゴズランなどを召集して、この良いニュースを発表した。一人の財政支援者！彼らは、そんな目当てがあることを信じることは出来なかった。にもかかわらず、彼らはそれを見ることになった。それは確かに、存在していた。ただ、その若い財政支援者に食事を提供する取り敢えずの資金を集めなければならない。その夕食会は、兎に角、素晴らしい必要があるからである。

だが、彼らは空しさを感じた。誰も資金を持っていなかったからである。将来の雑誌を出立する場所を、都の中心ではなく地方で開業し、その辺りの食品商の間で融資させることに決めざるを得なかった。また、会食の為には、銀食器を見つけなければならない。幸運にも将来の協力者の一人が、公営質屋に若干のテーブルセットを入れていた。一日間、これらのテーブルセットを引き出すことで、資金を借りることに決めた。

夜が来て、その出来事は起きた。人々は寄せ集めの銀食器のテーブルについた。食べたり、飲んだりが中心の会である。若い百万長者をもてなして、皆で食べて飲んだ。若者に細かい気配りをしながら称賛した。お世辞を言い、彼が口を開けば拍手喝采した。バルザックは追加的に、将来の文学的繁栄を披露するような元気の良い演説を発表した。それはまるで成金の成功の夢のような話であった。そして、騒々しい運びの成り行きで乾杯



の発議になった時、『ゴリオ爺さん』の作者は、親密で暖かい素朴な調子の声を取り戻して、その主賓に告げた。

「私達のとても親しい友人に、是非とも表明して頂きたい。『クロニック・ド・パリ』の計画に対して、貴方から何をしてお頂きますか？」

銀行家の息子は満足気に答えた。「紳士の皆さん、貴方達への支援を、僕のパパに聞いてみることを約束します。」

バルザックは、テーブルクロスのように青白くなった。素晴らしい夕食の後で、愚か者達が、非凡な才能を演じ続けていた。

しかしながら、『アルシスの代議士』の作者は、こうした敗北に於いて崇高であった。烈火の運命に強制されて叫び声を発しても、そこにもはや何の当惑もなかった。「今日中に何とかしなければ。質屋に、テーブルセットを返さなければ、代金が割増されてしまう。」

### 39, デュタックとの関係—シャンフルーリイ—

デュタックはバルザックと同様に、事業的才能を持っていた。それは著名な新聞や雑誌、それほどの資金もない儘に開業する劇場に、広告の見出しを付けるような少し怪しい才能である。デュタックはバルザックが、巧妙な才能を発揮して、名声を獲得したことに貢献した。バルザックというトゥランジョーの有名人は、とても細かい理屈を並べるノルマンの古い学者的執行吏を、その共犯のために見出した。笑いを好むことと、その正直さは、全く二人の血筋であり、その取引には、したたかな伊達好みがあった。そして彼らは、そうした自らの性格の最初の被害者でもあった。

或る晩、これらの2人の大物金融業者が、互いにからかいながら見積もりをした。「この私を持ってしても、君を本屋業だけに閉じ込めることが出来なかった。」満足感の大きい笑いでデュタックは言った。

「君は本当に信じているのか！私が本屋業に閉じ込められなかったと…。」その後で直ぐに、バルザックは立ち上がって、「そこの整理箱を開け

てくれ。そして、そこにある本を、元に戻してくれ。私が信じる結婚生活の小さな苦痛を元に戻してくれ。そして、私とその本の中に、閉じ込められてしまったことを理解してくれ。」そう言うと、二人は腹のボタンを外して大笑いした。そしてデュタックは、この作家に対する称賛に満ちた表情で退出したのであった。

#### 40、戯曲の共同制作―無記名

1839年の終わり頃、ポルト・サン・マルタンの支配人のハレルは、バルザックに1つの戯曲を求めた。「私は、貴方の舞台に調度良い戯曲を持っています。」と作家は答えた。「作品は既に出来ているのですか?」「それは完璧に…。私は来週、ポルト・サン・マルタンの俳優の前で、読み上げることが出来ます。」それですぐに来週会う約束がされた。家に帰って、バルザックはテオフィエ・ゴーチエに緊急の通知を送って、翌日に自分を訪ねるように求めた。

早朝6時に、リシュリュエ街の彼の家に、『アルベルテュス』の作者は到着した。バルザックは既に仕事机の前に座っていた。

「私はポルト・サン・マルタンの支配人のドアセイント・マーティン部長に明日、完成した戯曲を読み上げることを約束した。」と彼は詩人に言った。「それでは、貴方から、あらかじめ私に作品の内容を教えてください！私は貴方の話に、耳を傾けますから。」

「実は、その戯曲はまだ書かれていないんだ。」ゴーチエは始めに、そのことに驚かされた。「それでは、どのように戯曲を作るのですか?」「君と同様に、私は、ローラン・ジャン、ペロイ、エドワード・ウーリヤック、ラシェリーを呼んでいる。君達は1日中、割り当てられた其々の仕事を実行する。私は夜になって、それらを纏めて君達の仕事を再検討する。そうすれば、明日、戯曲を読み上げることが出来る。」バルザックは、さらにこう付け加えた。

「一幕の上演とは何であるか？それは大よそ4百行の会話に過ぎない。

1日のヤツツケ仕事で、簡単に出来る。」

「まあ、いいでしょう。やってみることにしましょう。それでは今、ここで戯曲の主題を話して下さい。」とゴーチェは言った。すると、バルザックは両腕を空に掲げて、「ああ、ゴーチェ君！ そんな君の要求に応じていたら、1日での準備なんて決して出来やしない。」と叫んだ。実際には、およそ何週間も、『ヴァントリン』の読み上げは、行なわれなかった。

## VII, 【1948年頃の出来事】

### 41, ロワイヤル宮殿への侵入—無記名

1848年2月24日、バルザックは、ロワイヤル宮殿のバラックの周辺で起こった紛争を、傍観していた。それから彼は、群衆がまもなく侵入するであろうティルリイー宮殿を目指して進んだ。群衆の進行は、その多数者の大きな動向によって促進させられた。バルザックはそうした宮殿の侵入者に混じっていた。場所の危険性は、パリ伯爵公邸の下にまで及んだ。そして、混乱の渦中で、著作物で覆われている机の紙片に目を留めた。それはルイ・フィリップの孫達の最後の宿題や、書面の練習帳であった。

ルイ・フィリップ公邸への侵入の記念に、彼はそうした紙片を収集した。そして、彼は疲れてしまい、眼前で起こった青ざめた光景に嫌悪の念を抱いた。ティルリユーの雑踏は、破壊的な苦痛なしでは、過ぎ去らなかった。サン・フロレンティン街の角で、バルザックは群衆の中にいるレオン・ゴズランを見つけた。そして彼は、その友人の所に近づいて行って、国王の孫達の筆跡に溢れた紙片を見せた。

### 42, 代議士の代表権—ガブリエル・フェリイ

1848年2月24日以降の或る晩に、バルザックは若い友人のオーギュスト・ヴァッケリイと散歩しながら、突然、その若い友人に言った。「アンリ

5世が戻って来た時、ヴィクトル・ユーゴーが妥協して、共和政府と手を結んだことは実に残念だ。其処には如何なる状況も可能であった！全ての野心が彼に許されていたのに。ああ！どうして彼は選挙で投票者の声などを請願したのか？何故、憲法制定議会で、彼自身を選出させたのであろうか？」

「済みません。バルザックさん！」ヴァッケリーが答えた。

「貴方も同様に、投票者に請願しました！そして、代議士の代表権を得ようとしたではありませんか。」すると『人間喜劇』の作者は、その対話の相手をまじまじと見つめながら言った。

「ああ！私が行った其のこと、それは全然問題が別である。何故なら、ユーゴーのように、私は代議士に選出されなかったのだから。」

#### (注)

(1) 翻訳した原文は、*Balzac anecdotique: choix d'anecdotes recueillies et précédées d'une introduction* である。1908年に、ジュール・ベルトー (Jules Bertaut 1877-1959) の編集で、Paris bibliothèque international d'édition から出版された。原文の頁数は94頁で、全文を日本語訳すれば、400字原稿用紙で100枚程度になる。前回の『『バルザック逸話集』(序文と編集ジュール・ベルトー)の翻訳(1)』(専修人文論集第99号, 12月)は前半の訳読であり、今回(2)はその後半部分である。

原文に目次はないが、全体を俯瞰するために目次を作った。字句に多少の変更があるので、前回(1)に提示したが、今回(2)にも付加する。尚、小林が取り上げた9つの逸話には、下線を引いた。

#### 『バルザック逸話集』目次

序, 【浪漫主義と逸話】—ジュール・ベルトー

#### I, 【風変わりな容貌】

1, 特徴のある鼻と猛獣使いの眼—テオフィル・ゴーチエ 2, 太った男—レオン・ゴズラン 3, 上機嫌の絶え間なさ—ボンタピス 4, 不調和な衣服—ラマルチエス

#### II, 【生活と趣味】

5, 観劇嫌い—レオン・ゴズラン 6, 執筆の様子—ウエデット 7, 大食漢—ルイ・ニコラルド 8, 果物の食べ方—レオン・ゴズラン 9, 珈琲の焙煎と紅茶の秘儀—レオン・ゴズラン 10, 煙草嫌い—テオフィル・ゴーチエ

Ⅲ, 【社交界での異様な振る舞い】

11, 或る文学の夜会で—フォルニエ 12, 常習的な犯行—無記名 13, 華麗な杖—ウェデット14, 内輪のパーティー—フェリイ15, 夜会からの退出—オーガスト・ヴァルヴィエ 16, ジュール・サンドに与えた白い馬—ウェデット17, マカロニと英国の若い女性—レオン・ゴズラン18, 青い上着と金ボタン—エルネスト・バザアル 19, 愛想の良さ—ジョルジュ・サンドに即して 20, 異様な格好で送られたジョルジュ・サンド—フェリイ 21, ウィーンでの若い学生の誠意—シュルヴィル 22, 舞踏会での頭巾つきマント—アルベリック・スコンに即して

Ⅳ, 【小説家の特異な人生観】

23, 人生とは勇氣—無記名 24, ベルニー婦人の思い出—フェリイ 25, 女性の手紙と文体の形成—フェリイ 26, 文学に通じる人々—ガゼット 27, シャンフルーリー—との相似—無記名 28, 未知の訪問—シャルル・モリス

Ⅴ, 【ジャルディ荘にて】

29, 斜めの土地—レオン・ゴズラン 30, 小さい鈴—レオン・ゴズラン 31, 債権者—レオン・ゴズラン 32, 空想的調度品—レオン・ゴズラン 33, 胡桃の木—レオン・ゴズラン

Ⅵ, 【夢と現実の間で】

34, 優雅な趣味—アルベリック・スコン 35, ドラマとコメディの夢—レオン・ゴズラン36, 『赤馬』の協会—アルフォンス・カー 37, オデオン座の公演チケット—フェリイ  
38, 『クロニクル・ド・パリ』出版の画策—レオン・ゴズランに即して 39, デュタックとの関係—シャンフルーリー— 40, 戯曲の共同制作—無記名

Ⅶ, 【1948年頃の出来事】

- 41, ロワイヤル宮殿への侵入—無記名 42, 代議士の代表権—フェリイ  
(2) (『十九世紀フランス文学』(V.L ソーニエ, 1952年, 共訳 篠田浩一郎・渋谷孝輔, 白水社, 1958年3月)は, 「十九世紀は単にその前半期にだけロマン主義的であったのではなく, もろもろの傾向や危機や変異などの衝突にもかかわらず, 全期間を通じてそうであった。ロマン主義の清算こそ二十世紀の大きな文学的事件であり, それは今世紀の中頃, 二度にわたる世界大戦の震動ののちに, 大体おわたったのである。ロマン主義は愛国的な価値の再建を主張したが, われわれは現実的で, スポーツ的で, 技術的な世界に生きている。」(第三版へのはしがき) という立場で書かれている。

ソーニエの著書には, 広大な十九世紀フランス浪漫主義の中で, 『バルザック逸話集』の序文でジュール・ベルトーが主張した「浪漫主義者としてのバルザック」のことが, 逸話に登場する主要な作家達との関係で, 如何なる関係にあるのか概観が出来る。ソーニエは, 十九世紀のフランス浪漫主義という作家達の「気質」によって多様化したものを, 「心情と視覚のものである『オランピオ』のロマン主義(ユゴー), 転

落した心の宿命を描く『ロラ』のロマン主義（ミュッセ）、ぞっとする狂気と暗いユーモアの『アルベルチェス』のロマン主義（ゴーチエ）、『モーゼ』の、すなわち思想のロマン主義（ヴィニ）、象徴的で宇宙的な視力、「透視者」（ヴォワイヤン）のロマン主義（ミシュレ、バルザック）、悲しげなはずら、『ファンタジオ』のロマン主義（ミュッセの劇）。これらのもろもろの態度のあいだにもまた、いろいろの亜流や競争者の群が右往左往していた。」「（第二章 巨人たちの世代（一八三〇）—赤チョッキと真紅のロマン主義—ロマン主義の定義 ロマン主義の諸段階とその型）に分類する。評伝や『バルザック逸話集』からも、象徴的宇宙的視覚を持つバルザックが、ユーゴーやゴーチエとは気が合い、ヴィニとは思想が合わなかったことが読み取れる。

また、ソーニエの「悪であれ、善であれ……問題はそれを説明し、創造することであった。賞讃したま憐れむ権利を忘れることなく、バルザックはとりわけ人間のエネルギーを、その跳躍と崩壊とにおいて観察することに時間を費した。」（同上「六 バルザック〈人間喜劇〉」）の指摘は、ジュール・ベルトーの『バルザック逸話集』の「序文」の主張と類縁関係がある。今後の研究課題としては、ジュール・ベルトーの逸話には登場しない歴史家のミュッセとバルザックの思想的比較を試みたい。

- (3)（『バルザック 人と思想』高山鉄男，清水書院，1999年8月）の「Ⅳ 模索と成熟」の章の「バルザックの日常生活」「コーヒーの効用」「バルザックのステッキ」などの節は、(1)の翻訳でも、逸話に加担する部分であり、その特異な作家像を掴むのに参考になった。それは(2)翻訳でも同様であった。

しかし、やはり「Ⅲ 文壇への登場 Ⅳ 「哲学的」作品」などの章に、バルザックという作家の本質的な思想問題が孕まれている。『あら皮』（1832年）が刊行されて、バルザックは哲学的作風からなる短篇を、『哲学小説集』という題の全三巻として刊行した。収められた十二編の短篇の主題は、バルザックが「思念の破壊的力」（同上『哲学小説集』）と呼んだものである。高山は、「要するに、今日『哲学研究』に収められた作品には、固定観念と化し、情念と化した思念が、主人公を破壊する様が描かれている」（同上「情念の破壊作用」）のであって、「全体として見たとき、『人間喜劇』が情念による、生命のエネルギーの消耗過程を描いていることは間違いない。その背景には、宇宙全体を唯一のエネルギーの変容と消耗の過程と見る哲学がある」（同上『哲学研究』と『風俗研究』）と言う。

- (4)（『バルザック伝』アンリ・トロワイヤ，訳者 尾河直哉，白水社，1999年11月）の「第三部 白いページ」の「その後」に、バルザック亡き後、1850年11月頃からの、未亡人ハンスカとシャンフルーリイーが愛人関係になったことが、描かれている。そこには、「彼女はまるで成熟したベルニー夫人が青年オノレにたいして果たした役割を演じているようだった。昨日知り合ったばかりで、明日には自分を捨てるかもしれない男によって9か月前に死んだ著名な夫の記憶を裏切ることに、彼女は一瞬たりとも後悔をしていなかった。」とある。

ハンスカ夫人は、バルザックの原稿の中に未刊小説があることに気づき、金目当て

に、その完結をシャンフルーリイーに持ちかける。だが、それは不作法なやり方だと彼は拒絶した。彼はハンスカ夫人に辟易して、喧嘩も絶えなくなり、1851年11月に二人は別れた。こうした後日談を踏まえると、「27, シャンフルーリイーとの類似—無記名」の逸話も、単なる小話ではない。尚、アンリ・トロワイヤの「原注」と「人名索引」は、翻訳の参考になった。

- (5) 『わが兄バルザック—その生涯と作品』ロール・シェルヴィル、1858年、訳者大竹仁子、中村加津、鳥影社、1993年4月)の脚注に、レオン・ゴズランに関して、「Léon Gozlan (1803-1866)。文士。一八三三年、ベシェ夫人のところでバルザックと出会い、一八三八年頃、親交を深める。バルザックは『続女性研究』を献呈。一八五六年、エツェルから『部屋履きのバルザック』、一八六二年、レヴィから『自宅のバルザック、ジャルディ荘の思い出』を出版。」とある。ジュール・ベルトーは『バルザック逸話集』(1)と同様に、(2)でも、レオン・ゴズランの語りを多く選択した。

尚、(『バルザックと19世紀巴里の食卓』アンカ・ミュルシュタイン、2010年、訳者塩谷祐人、白水社、2013年1月)も、脚注を含めて参考になった。『バルザック逸話集』の翻訳にも、簡略な脚注が必要であり、今後の課題にしたい。

- (6) ジャルディ荘での出来事は、他の評伝にも多く言及される。『バルザック』(ツヴァイク、訳者 水野亮、早川書房、1959年6月)の「第四篇 小説家バルザックの栄光と悲惨 第十七章 サルディニヤ銀山」に、その荒れた土地で、「例えばそこにパインアップルの栽培場を設けたらどうだろう。パインアップルをとおい異国から波路はるかに船でとりよせるかわりに、暖い日ざしのもとで温室栽培をやろうと思いついたものはまだフランスには誰もいない。方法が正しきを得さえすれば、これで十万フラン儲かる。従ってこの家にかかるであろう費用の三倍になる。」と友人のゴーチエに語ったことが取り上げられた。

他にもバルザックが道に砂利を敷いて、林檎や梨の果樹を植えたりする悪戦苦闘が描かれているが、ユーゴーとの「胡桃の木」の逸話はない。「空想のパインアップル」の逸話は、単なる喜劇では片付かないような悲喜交々な性格がある。それと同様に現実的に所有が維持された「胡桃の木」の眩惑も、バルザックの深刻な状況的存在を暗示する。